Tokushima University Archaeological Heritage Management Office Newsletter

徳島大学埋蔵文化財調査室ニュースレター

No.3
2016 Spring

弥生時代青銅器からみる庄・蔵本遺跡

弥生時代になると、日本列島では朝鮮半島から青銅器が伝わり、前期末には青銅器生産が始まったと考えられています。青銅器は、鋳造された直後は金色に輝いていました。その輝きは当時の人々を魅了し、銅鐸・銅剣・銅矛などの大型の青銅器は弥生時代集落のマツリの道具として用いられたと想定されています。

本学構内遺跡の庄・蔵本遺跡は、縄文時代晩期から近世の遺構・遺物がみつかっており、その中には弥生時代後期以降の青銅器も数多く確認されています。今回は、徳島から出土した弥生時代の青銅器について紹介し、庄・蔵本遺跡の青銅器について考えてみたいと思います。

（脇山佳奈）

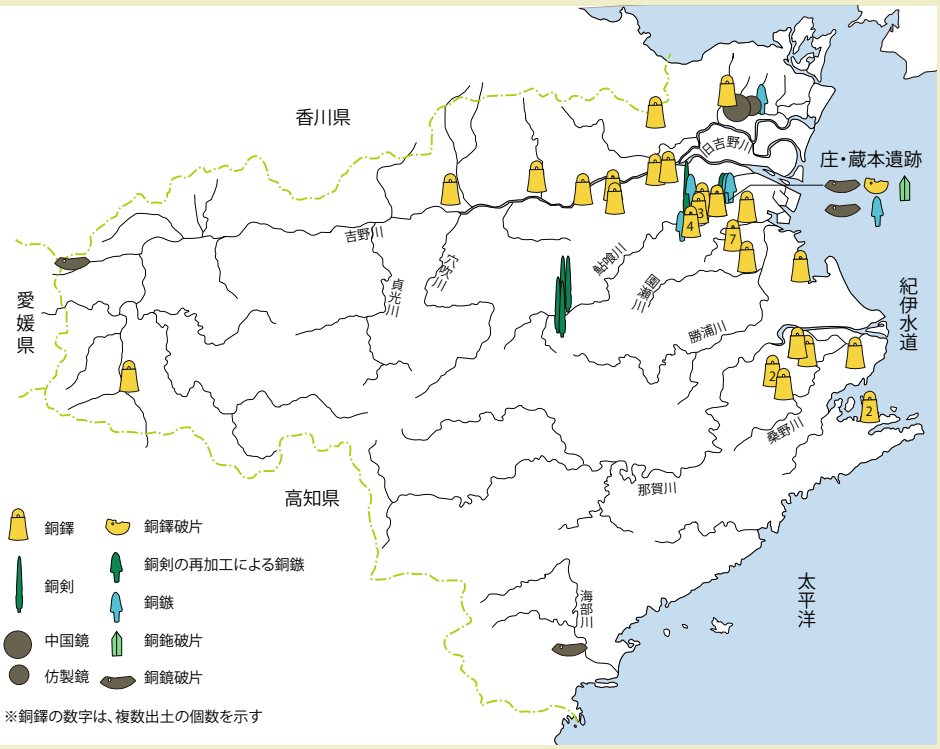
徳島県の青銅器

徳島県でみつかった弥生時代青銅器の分布図を下に掲載しています。徳島において銅鐸は弥生時代中期から後期までみられ、出土したと伝えられているものを含めると合計 49 点を数えます。なお、銅鐸の出土数が最も多いのは兵庫県の 68 点で、昨年は南あわじ市にて 7 点もの銅鐸がみつかりました。銅鐸の分布をみると、吉野川沿い、鮎喰川沿い、那珂川南岸において数多くの銅鐸が出土していることが分かります。銅剣は 5 点が確認され、いずれも鮎喰川流域から出土している点に特徴があります。弥生時代後期から終末期（庄内式期）には、完形の中国鏡・仿製鏡、銅鏡破片、銅鏃が出現し始めます。これらの分布は、特に旧吉野川北岸と鮎喰川下流に集中しています。

庄・蔵本遺跡の青銅器

本学に位置する庄・蔵本遺跡からは、第 2 次調査で斜縁鏡破片 1 点、第 17 次調査で異体字銘帯鏡破片 1 点、第 27 次調査からは銅鐸破片 1 点・銅鏃 1 点・銅鉇（ヤリガンナ）破片 1 点などが出土し、徳島においては、様々な種類の青銅器が確認されています。また、本遺跡の南西側の矢野遺跡、西側の庄遺跡、南側の南庄遺跡からは銅鏃が出土しています。青銅器の分布からみると、庄・蔵本遺跡やその周辺の遺跡は弥生時代後期から終末期の中心的な集落であったと考えられます。

次のページでは、庄・蔵本遺跡出土の銅鐸破片と異体字銘帯鏡の破片を紹介します。



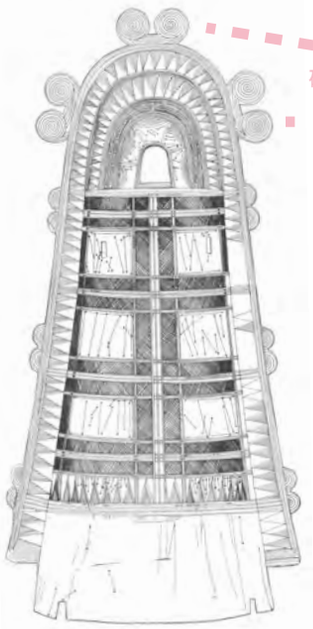
徳島県の青銅器分布

銅鐸・銅剣の分布については、河出書房新社 1994『図説　徳島県の歴史』より引用・加筆

銅鐸破片

庄・蔵本遺跡第 27 次調査（立体駐車場新営地点）では、旧河道から弥生時代後期の突線鈕式（近畿式）銅鐸の飾耳の一部分が出土しました。共にみつかった土器から弥生時代終末期に埋没したものと考えられています。この銅鐸破片は両側から穿孔されており、紐などを通して使用したものと考えられます。最大長7.3㎝、重量 85.5ｇであり、その大きさから推定すると、100 ㎝以上の大型品であったと考えられます。突線鈕式銅鐸の破片は全国で約 35 遺跡から見つかっています。

本遺跡から南西約 8 ㎞に位置する矢野遺跡では完形の突線鈕式銅鐸が埋納されており、両遺跡の関係が注目されます。



徳島市矢野遺跡出土銅鐸
徳島県埋蔵文化財センター 2003
『矢野遺跡』1 より転載

庄・蔵本遺跡出土の銅鐸破片
立体駐車場新営地点

異体字銘帯鏡の破片

庄・蔵本遺跡第 17 次調査（中央診療棟新営地点）からは、異体字銘帯鏡の破片が出土しました。この鏡は前漢代（紀元前 206 年～紀元後 8 年）の中国鏡です。鈕の周囲には篆書を用いて銘文が刻まれていることから、異体字銘帯鏡という名称がつけられています。この中で本遺跡出土鏡のように縁の幅が広く、ゴチック体のようになるものは、中国において紀元前 25 年～紀元前後を中心に流通したと考えられています。日本列島では、このタイプの異体字銘帯鏡は、主に弥生時代後期から終末期の遺跡においてみつかっています。

本鏡は遺構から出土したものではありませんが、出土地点は、弥生時代終末期の集落跡の近くであり、周辺の同じ層位からも同時期の遺物が出土しているので、同じころに廃棄されたと考えられます。復元径は 9.4 ㎝で、全体的に摩耗しています。穿孔が一か所あり、穿孔の近くの面（写真上）は他の面より研磨されていないことから、破片の状態で使用された後に、穿孔部分付近が壊れたものと考えられます。下の写真は本遺跡出土鏡に類似する完形のものです。

庄・蔵本遺跡は弥生時代後期から終末期の青銅器がみられる集落ですが、その後の古墳時代になると青銅器がみられなくなります。

庄・蔵本遺跡出土の異体字銘帯鏡破片
中央診療棟新営地点

上志佐波屋出土の異体字銘帯鏡
佐賀県立博物館編 1997
『椛島山遺跡調査報告書』より転載

解説パネルの紹介

新蔵遺跡にパネルを設置しました！

2004 年に調査した新蔵遺跡（日亜会館（地域・国際交流プラザ）新営地点）の解説パネルを、徳島大学本部(事務局)の東側に設置しました。解説パネルには、発掘調査時の写真や出土品などを掲載しています。解説パネルの設置は常三島遺跡工学部電気電子棟新営地点に続き 2 例目です。引き続き、庄・蔵本遺跡、常三島遺跡に解説パネルを設置する予定です。

新蔵遺跡では、絵図や文字記録によって予想された上級家臣の住んだ武家屋敷地跡がみつかりました。徳島城と近接しており、城の出入口である鷲の門までは歩いて 10 分の立地です。是非、遺跡に足を運んで、江戸時代人々の暮らしを想像してみて下さい。

新設された解説パネルの様子

右奥の建物が日亜会館で、パネルの発掘調査地点にあたります

常三島遺跡の解説パネルを見学しよう

ここでは、最初に設置された解説パネルの紹介をします。2002 年の常三島遺跡工学部電気電子棟の調査では、江戸時代の素掘り（17 世紀前半）と石組み（17 世紀後半～ 18 世紀）の船入状遺構がみつかりました。素掘りのものは徳島藩の船置所に関する遺構、石組みは家臣の私的船置場と考えられています。2003 年に電気電子棟の渡り廊下の床面に、舟入状遺構の解説パネルを設置しました。石組みの一部も現地に保存しており、いつでも見学できるようになっています。来年度には、蔵本・常三島・新蔵キャンパスの遺跡見学会を予定しています。奮ってご参加ください。

解説パネルと石組み舟入状遺構

ホームページのリニューアル

調査室のホームページをリニューアルしました。本学に所在する庄・蔵本遺跡、常三島遺跡、新蔵遺跡に関する報告書、調査・研究成果を記載した紀要、調査室の活動を広く紹介するニュースレターなどを閲覧・ダウンロードできます。また、講座や展示の案内も随時発信します。

ホームページアドレス　http://tokudaimaibun.jp/

トップページ

展示会だより

庄・蔵本遺跡の弥生木製品

ー平成 27 年度徳島大学埋蔵文化財調査室ミニ展示ー

徳島大学蔵本キャンパスは、縄文時代晩期から江戸時代の遺跡である庄・蔵本遺跡の上に立地しています。徳島大学埋蔵文化財調査室と徳島県教育委員会によって 1982 年から計 29 次の調査が行われています。弥生時代に関しては、水田跡・畠跡・墓・住居などがみつかり、当時の生活や集落の様子をうかがい知ることができます。

特に、溝や旧河道からは農具・祭祀具・狩猟具・容器・楽器・建築部材などの木製品が良好な状態で出土しました。今回は、これまでに保存処理を終えた木製品を中心に展示しました。また、開催期間中に展示解説という新たな試みに取り組みました。

展示期間：2015 年 9 月 7 日（月）～ 11 月 29 日（日）
開催場所：徳島大学附属図書館本館 3 階資料展示室
来場者数：578 名

展示ポスター

本展示への感想を紹介します

- 工具で製作したレプリカの展示をしてくれたらと思います。
- 解説をしてもらいながら展示を見ることができたのでわかりやすかったです。
- 身近に考古学を感じることができました。
- 昔の日本を少し知ることができました。
- 展示ポスターのおかげで工具の使い方がわかりやすかったです。
- 昔のものにもかかわらず、木製品の形もしっかり残っていることに驚きました。

展示解説風景

展示のお知らせ

庄・蔵本／新蔵遺跡に見る　土の造形

日時　2016 年 2 月 1 日（月）～ 5 月 28 日（土）

場所　ホスピタルギャラリー be(ビ・イ)
徳島大学病院西病棟 1 階ロビー

主催　徳島大学病院
協力　武蔵野美術大学基礎デザイン学科　徳島大学埋蔵文化財調査室
監修　武蔵野美術大学基礎デザイン学科教授・板東孝明

編 集 後 記

今回は、庄・蔵本遺跡出土青銅器を取り上げ、その意味について紹介しました。また、新蔵遺跡の解説パネル設置とホームページのリニューアルのお知らせをしました。今後もより多くの人に大学構内遺跡について知っていただけたらと思っています。

（脇山）

編集発行：徳島大学埋蔵文化財調査室　　2016 年 3 月 31 日　発行

〒770ー8503　徳島県徳島市蔵本町 2ー50ー1　TEL・FAX　088-633-7236
ホームページ　http://tokudaimaibun.jp/